

韓愈の詩の中の二、三の人間像をめぐって

著者	川合 康三
雑誌名	集刊東洋学
巻	63
ページ	39-55
発行年	1990-05-30
URL	http://hdl.handle.net/10097/00132427

韓愈の詩の中の二、三の人間像をめぐって

川 合 康 三

一 はじめに

韓愈の詩を読んでいると、彼のまわりには一風変わった人物が集まっていたかのような印象を受ける。風変わりに見えるというのは、そこに描き出された人間像がそれまでの文学の中に形象化されてきた人間の型に収まらないからである。韓愈の周辺にそうした人物が事実として存在したということよりも、韓愈の目が周囲の人物をそのように捉え、韓愈の筆が彼らをそのように描き出したということに注目したい。つまり事実を問題とするのではなく、認識と表現の問題として捉えたいと思う。

それを説明するには、韓愈自身の用いた名馬・伯樂のよく知られたたとえを援用できるであろう。「世に伯樂有りて然る後に千里の馬有り。千里の馬は常に有り。而るに伯樂は常には有らず。」（「雜説」其四⁽¹⁾）いうまでもなく、この寓

意は有為の人材もそれを見出してくれる人に出会わなくては埋もれてしまうことをいうもので、同じたとえは韓愈の「人の為に薦を求むる書」⁽²⁾にもみえ、「于襄陽に与うる書」⁽³⁾では伯樂のたとえはないものの、人が世に出るにはまずそれを顕彰してくれる識者が必要であることを述べて援引を求めているのも、同じ趣旨のものである。これをいま韓愈の直接の意図から離れて一般化させるならば、名馬という存在は伯樂という認識者を得て初めて存在しうる、すなわち存在を存在たらしめるものは認識である、という主張とも解しえよう。韓愈を取り巻く奇矯な人々は、韓愈の認識を通してその奇矯を顕現したのである。したがってこれは韓愈の人間認識、人間観の問題となる。韓愈が描き出した人物は、どのように風変わりなのか、いかに従来の文学の中で形作られてきた人間像から逸脱しているのか、それを見ることを通して韓愈の人間観の一端を探ってみたい。

二 孟郊

これから取り上げようとする韓愈の作品のうち、「孟生詩」「劉生」の二篇はいずれも身辺に実在した人物の名前をそれだけで詩題としている。中国の詩で人名をそのまま題とするのは大体が歴史上の人物に限られ、周囲の生身の人間の場合は「寄」「送」「贈」など、作詩の状況を説明することばを伴うのがふつうであろう。たとえば李白の集に「西施」「王右軍」など、じかに過去の人物の名を題とする篇はあるが、孟浩然の人となりをつたった作は「贈孟浩然」と題されている。それはおそらく過去の人物の場合はすでに典型化されているために、名前だけで「詠史」のジャンルに収まるのに対し、同時代の人間の場合は「寄贈」とか「送別」とかいったジャンルを借りなければ、人そのものを主題とする内容分類が詩の観念の中に用意されていないか、たためであらう。

「孟生詩」については「送孟郊詩」と題するテキストもあり、「劉生」についてもそれを樂府題とみなす説もあるが（後述）、そうしたテキストの異同、解釈の相違が生じているのも、生身の人間の名をそのまま題とすることに對して異和感があつたことを示しているのではなからうか。

詩題というものが作者自身の直接の命名でない可能性を

顧慮するとしても、詩の本文の方は明らかに孟郊なり劉師命なり、韓愈の周囲の人物そのものを主題としているのであつて、どちらも従来の内容分類にあえて押しこめば「送別」に属するものではあるが、送別の状況は詩の末尾にわずかに添えられているにすぎず、孟郊という人間、劉師命という人間、それを描き出すことに作者の関心がもっぱら注がれているのは確かだ。

孟郊については、「長安交遊者一首 孟郊に贈る」詩が最も早い時期に繫年されているが（貞元九年）、そこでは都長安に渦巻く人間を二つの範疇に分け、自分と孟郊とは同じ部類に属する人間であることを確認している。詩には対立概念が何組もちだされ、詩中の語を用いて分ければ「富、高門、笙竽、榮、愚」であらわされるグループに對峙するところの、「貧、陋室、文史、悴、賢」の要素で成り立つ集團に、韓愈と孟郊は属するのだと述べている。

ごく初期の詩ではこのように友人と自分を同じタイプの間であることを確認し、聯繫を強調するものが目立つ。「北極一首 李親に贈る」詩（貞元八年）においても、李親と己れとを「羈羽」「沈鱗」になぞらえて、「風雲一朝会すれば、変化して一身と成らん」、一心同体となる希求を語っている。

李親や孟郊の中に韓愈が同質性を認めたのは、ともに仕

官を果たしていない苦しい境遇にあったことや、古への志向という共通の理念を抱いていたことが作用したのであるが、心情的には、「我れ年二十五にして、友を求むるに其の人に味し。西京の市に哀歌し、乃ち夫子と親しむ」（「北極一首贈李観」）、長安に出てきてほどない韓愈の孤立した思いが、この仲間意識、一体感に駆りたてているのであろう。

李観は早く没したために交遊はそこで終結するが、孟郊に対する態度はやがて己れとの異質性を認め、己れと異質であるがゆえに一層敬愛を深めていくという方向に変化していく。それを端的にあらわしているのは「酔いて東野を留む」詩（貞元十四年）であつて、

5 東野不得官 東野 官を得ず

6 白首誇龍鍾 白首 龍鍾を誇る

7 韓子稍姦黠 韓子は稍や姦黠

8 自慙青蒿倚長松 自ら慙ず 青蒿の長松に倚るを

と、孟郊に較べたら小賢しく、現実への適応力を備えた自分を対比している。韓愈自身もその一生の官人生活をたどつてみれば、不器用な文人の例に漏れないが、しかし後年の「児に示す」詩（元和十年）ににじみ出ているような升榮の満足感は、たとえ孟郊が同じ官位に達したとしても（それを仮定してみるとすら困難であるが）、孟郊の口から聞かれることはまず考えられない。「孟郊に答う」詩（貞元十

四年）があざやかに描き出しているような孟郊の天生の詩人的資質、そこに韓愈は己れとは異なる孟郊の人間を見ていたのだ。

「孟生詩」は貞元九年、徐州の張建封のもとへ身を寄せた孟郊を送る詩であるが、すでに述べたように送別の意よりも、そこに至るまでの孟郊の不遇を通してその人となりや、その前に力注がれている。五言五十四句にわたる詩の前半を引こう。

1 孟生江海士 孟生は江海の士

2 古貌又古心 古貌 又た古心

3 嘗読古人書 嘗て古人の書を読み

4 謂言古猶今 謂いて言う古も猶お今のことしと

5 作詩三百首 詩を作ること三百首

6 窅然感池音 窅然たり感池の音

7 騎驢到京國 驢に騎りて京國に到り

8 欲和蕪風琴 蕪風の琴に和せんと欲す

9 豈識天子居 豈に識らんや天子の居の

10 九重鬱沈沈 九重鬱として沈沈たるを

11 一門百夫守 一門 百夫守り

12 無籍不可尋 籍無くんば尋ね可からず

13 晶光蕩相射 晶光 蕩として相射し

14 旗戟翻以森 旗戟 翻として以て森たり

15 遷延乍卻走 遷延として乍ちに卻き走げ

- 16 驚怪靡自任 驚き怪りて自ら任うる靡し
 17 挙頭看白日 頭を挙げて白日を看て
 18 泣涕下露襟 泣涕下りて襟を濡す
 19 竭来遊公卿 竭来して公卿に遊ぶも
 20 莫肯低華簪 肯て華簪を低るること莫し
 21 諒非軒冕族 諒に軒冕の族に非ざれば
 22 応対多差參 応対 差參たること多し
 23 萍蓬風波急 萍蓬 風波急なり
 24 桑榆日月侵 桑榆 日月侵す
 25 奈何從進士 奈何ぞ進士に従う
 26 此路輾嘔嶽 此の路輾た嘔嶽なる

孟郊は世俗の秩序、価値、拘束が及ばない遠い世界に住む人である。容貌も精神も古えの人そのままで。「古」はいうまでもなく、韓愈が扱ひ所とし、標榜した觀念であるけれども、この詩で繰り返されている「古」には、韓愈がふだん主張しているような価値的な面は稀薄になっているようにみえる。「古」に心身ともに同化している孟郊を肯定しているにはちがいないものの、「古」への没入ゆえに生じてしまった当世との異和感の方が強調され、ちぐはぐなありさまがもたらすおかしさを帯びている。「古心」のみならず、容貌にまで言及しているところにも、それはうかがえるであらう。

古人の書物を読んで、古も今も違いはないとする認識は、韓愈自身の当時の認識でもあったはずで、たとえば「出門」詩¹⁰（貞元二年）の、「古人已に死すと雖も、書の上に遺辞有り。巻を開きて読み且つ想えば、千載も相い期するが若し」というのは、「嘗読古人書、謂言古猶今」と同じことをいっているのだが、しかしここではその認識を主張しているのではなく、時代錯誤に浸りきって本人はそれを自覚していない様態として描かれている。

今も昔と変わりはなないと思ひこんだ錯誤をさらに具体的に叙述してみせているのが次の部分である。「詩経」にもかなう三百篇の作品、それは堯の世の音楽を思わせる深遠なもの。孟郊の詩は古えの世の文学そのままである。それを携えて驢馬の背に跨って都に上ってきたのは、官中に奏せられてはいるはずの舜の曲に唱和するつもりなのだ。ところが宮廷は嚴重に警備されていて、とりつくしまもない。その拒絶の意味を理解することすらできず、孟郊は途方にくれてしまう。（5—18）

この一段が指している実際のことがらは、孟郊の進士応募とその失敗であらう。そのことを直接述べずに、宮廷にのこのこ出かけて行って門前払いを食らわされたというかたちで表現しているところに注目したい。同じ挫折を韓愈も経験したわけであり、博学宏辞科に何度も失敗した苦渋

はあちこちで吐露しているにもかかわらず、ここでは孟郊の下第をこのように潤色することによって、「古」の正当性の主張、それを許容しない当世に対する批判といった色合いは薄れ、かわりに鮮明に浮かび上がってくるのは、なんともぶざまで不器用な時代錯誤者の姿である。念を押せば、韓愈はそうした孟郊を嘲笑しているわけでは決してないが、孟郊の失態を距離を隔てて眺め、そのみじめな姿に肉付けし、あえていえば戯画化して描き出しているのである。

応科に失敗した孟郊は、次の準備のために都の権勢家と交際を結ばねばならない。が、頭を下げることもできず、上流階級ならぬ身にはなめらかな応対もむずかしい。(19—22) 容赦なく年とはとっていき、さすらいの身はいよいよ辛く、進士の夢は困難になる一方だ。(23—26)

27 異質忌処群 異質 群に処るを忌まれ

28 孤芳難寄林 孤芳 林に寄り難し

この二句に集約されているように、この詩は孟郊という人間の、人間の集合の中で孤立せざるをえない特異な人格を際立たせる。以下、詩の後半はその数少ない理解者である韓愈との交遊に触れ、張建封のもとへ赴くことを勧め、孟郊を鼓舞して見送るところで結ばれている。

一人のすぐれた人間がそれゆえに彼を取り囲む集団から疎外される、個人と世間との排斥の構図は、つとに『楚辞』

以来、中国の文学の動機の一つであり、美玉を抱きながら認められぬ、あるいは疎まれる人士の嘆きは繰り返してきただけのものであるけれども、そしてこの詩も基本的にはその結構の上に重なるものであるけれども、従来のそうした類型と趣きを異にしているのは、世からはじき出された人間の内部からその恨みを発しているのではなく、そうした人間の世における姿を客体化して眺めているところである。同情者には遠くない韓愈が、ここでは日頃の彼自身の主張を控えて、困惑する孟郊を包容し、慰撫する立場にまわっている。韓愈自身が含んでいた特性を更に極端なかたちで体現していた孟郊という人間を前にして、韓愈の方はただ孟郊を理解するだけで自己主張はしない。まっとうな人間になりすました韓愈を配置することによって、孟郊の奇態な人格が一層くつきりと浮かび上がることになる。すなわちこの詩の主眼は、「古」を主張することや、不遇の感慨をうたうことではなく、「古」と同化したために今の世と齟齬をきたした一人の人間の姿を描出することにある。そうした人間のありさまを形象化するのにみごとな効果を發揮している表現が、驢馬に跨って都へ上り、宮門で撃退されるという韓愈の潤色であった。

描き出された孟郊の姿が滑稽味を帯びてみえるのは、作者が孟郊の内部から離れて、世間通行の尺度に合わない男

のぶざまなさまを世間の立場に近づいた所から見ることによつてもたらされている。もし孟郊と一体化していたら、そのゆとりは生じない。ここに韓愈の文学を特徴づける要素がうかがえると思う。韓愈が詩文の中で繰り返している主張、その主張だけを抜き出して「思想家」として固定してしまうことは、韓愈の文学を成り立たせている最も重要な要素を見逃してしまうことになる。孟郊の抱いていたのは韓愈と同じ志向であつたにもかかわらず、そこから自在に距離をとつて眺めることができる、囚われない精神の躍動こそ韓愈独自の、余人にはみられないものなのだ。

客体化された孟郊の理念は韓愈自身のものであつたし、そのために世に受け入れられない状況も同じであつたから、孟郊を戯画化することは韓愈自身を戯画化することにもなる。韓愈は己れ自身の中にあるものを増幅拡大して孟郊を作りあげ、それを対象化しているのである。孟郊の戯画化が滑稽感を漂わせても冷たい嘲笑にはならず、どこか暖かみがこもっていることは、韓愈の自己を戯画化した何篇かの詩が自嘲、自虐には至らないのと同じである。

更に言えば、このようにして描き出された孟郊像は韓愈自身の姿を色濃く投影させたものであつて、我々が孟郊の作品を通して抱く孟郊像とは必ずしも一致していない。この詩の中の孟郊は自分の考えていたことと周囲の世間とが

齟齬したことに当惑し、嗟嘆しているけれども、自分自身の内部では自己の信念に何の疑いもたず、安定しているようにみえる。破綻は世との接触によつてのみ生じ、信念自体は揺るがない。だからこそ、そう思いこんで迷わない時代錯誤者の人間像が成立しているのである。この楽天的とまでいえる自己信頼の安定感は、孟郊ではなく、むしろ韓愈のものだ。孟郊自身の詩では、世間から拒絶された痛みをひたすらとぎすまし、あたかも世界全体から拒否されたごとく、形而上的なレベルにまで高めて、その怨嗟を繰り返したつてゐる。それは単に自分が周囲から疎外されているという悲哀にとどまらず、彼を取り巻く人間、長安の町全体、そして更に世界そのものの邪悪な意志によつて自分が危害を加えられているかのような、つきつめた危機感が孟郊の詩には充満している。韓愈の筆が孟郊を戯画化しつつ、そこに暖かみを帯びているのに対して、孟郊は自己を客体化しても、それは自己戯画化というより自虐の様相を伴ない、冷たく暗い笑いが底に響いている。世間に容れられないという同一の事態にもつきながら、被害者としての意識をいちずに尖鋭にし、内閉していく孟郊と、この詩のようにゆとりをもつて現実を再構成する韓愈との違いは、両者の資質の相違をはつきり示している。

三 盧全

「盧全に寄す」詩は元和六年、韓愈が河南令であった時、同じく洛陽に住む盧全の日常生活、そこに生じた小さな事件を述べながら、盧全の人となりを彷彿とさせた作である。七言六十六句の全部を引く紙数がないが、詩は盧全の赤貧生活から説き起こされている。

1 玉川先生洛城裏 玉川先生 洛城の裏

2 破屋數間而已矣 破屋數間なる而已矣

盧全のことを「玉川先生」と称しているのは、韓愈の盧全に対する関係を示すのではなく、詩中の登場人物として客体化したものである。この詩の中で人はみなあだなをもつて呼ばれ、そうすることによって現実から離れた、一種仮構の世界を構成している。現実との間に膜を隔てるこの手法は、のちに見ていくこの詩の滑稽感を生じさせるのを助けている。

「玉川先生」といういかめしい呼称で登場した人物に「破屋數間」の句が続くことによって、異質のもの同士が結合したおかしさがまず生じる。そのおかしさゆえに、この詩の中にあつて貧窮は嗟嘆すべきいまわしいものとする深刻さが薄らいでいる。

住まいに続いて、これも生活水準の指標となる使用人は

どうか。

3 一奴長鬚不裹頭 一奴は長鬚にして頭を裹まず

4 一婢赤脚老無齒 一婢は赤脚にして老いて齒無し

たった二人、その二人ともまともではない。身なりかまわぬ下男は、朴訥で気もきそうになく、それはおそらくこの家の主人に似つかわしいものなのだろうと、読者に予想させる。老婢の方も他の屋敷では雇われそうにない見苦しさ。盧家の貧窮を伝えるにはちがいないが、この二句も前から引き続いて、悲惨さより滑稽味を帯びている。

わずかに二人の奴婢が仕えるのは大家族。

5 辛勤奉養十余人 辛勤して奉養す十余人

6 上有慈親下妻子 上には慈親有り下は妻子あり

扶養家族の多さも貧しさを増大させる事態ではあるが、一家の喧騒が聞こえてくるかのようだ。

こういう暮らしの中で、主人はいかに生きているかといえ、

7 先生結髮僧俗徒 先生は結髮より俗徒を憎み

8 閑門不出動一紀 門を閉ざして出でること動もすれば一紀

反俗は中国士大夫の精神の系譜の一つであるが、それはふつう世俗に対する蔑視と、己れの内なる価値の確認とを表裏としているもので、反俗の態度を持つることによって自身は内面に安住できる世界を保障されもするものだ。し

かし盧全の場合は、内的安定の面よりも、世間に対する憎悪が先に立ち、ひたすら攻撃的であるかにみえる。それは一度世に出て挫折を味わってからのものではなく、「結髪より」、ほとんど生得的な彼の性癖であつたという。

門の内側に閉じこめることは反俗の徒の形態であるが、たとえば同時代を生きた白居易が、

一物苟可適 一物苟も適う可けんば
万縁都若遺 万縁都て遺つる若し
設如宅門外 設し宅門の外の如きは
有事吾不知 事有るも吾れ知らず

(「春に新居を葺く」詩)

と、門の内側の世界に自足し、その外のことは関与しないといひ、

風竹松煙昼掩関 風竹松煙 昼にも関を掩い
意中長似在深山 意中は長えに深山に在るに似たり

(「長安閑居」詩)

などのように、門というもので外界と内部とを区切り、「門を閉ず」ることによって内側の世界で閑暇自適の境地を享受しているのを思い起こせば、盧全の内閉は外への憎悪のエネルギーが捌け口のないまま内に渦を巻いているような、精神の安定とはほど遠い様相を呈している。そのために詩の後半に記されているような外部との悶着が、瑣細

なことを契機として噴出するのである。

外に出ないから生活はいよいよ苦しくならざるをえない。

9 至今鄭僧乞米送 鄭僧をして米を乞えて送らしむるに至り

ては

10 僕忝果尹能不恥 僕は果尹を忝くして能く恥じざらんや

11 俸銭供給公私余 俸銭供給す公私の余

12 時致薄少助祭祀 時に薄少を致して祭祀を助く

布施を受ける立場にあるはずの坊さんまでが見るに見かねて恵んでいるというのでは、県令をおおせつかっている私、為政者に連なるものとして恥じずにはいられない。そこで韓愈も給与の一部でもって援助するが、盧全の極貧に対処する韓愈の態度には精彩が乏しい。ほどほどに善良な官として振舞っているにすぎない。この詩全体を通して韓愈はその立場を越えることはなく、平凡な韓愈が配置されることによって、世俗を拒絶する盧全の人間が浮き彫りにされる。

13 勸參留守謁大尹 留守に参り大尹に謁せよと勧むるも

14 言語纔及輒掩耳 言語纔かに及べば輒ち耳を掩う

就職活動を勧めようと一言口にしたとたん、彼は耳をふさいでしまう。その大袈裟な拒絶の態度にも、盧全の反俗が物静かな隠棲ではなく、憎悪をむきだしにした世俗への拒否であつたことが示されている。盧全が許由の後裔であ

るのに対して、地方長官たちへの面会を助言する韓愈は、こ
こでもいたって常識的な生活者としての姿を呈している。

盧仝のような隠棲者がまわりにいなかったわけではない。

15 水北山人得名声 水北山人 名声を得て

16 去年去作幕下士 去年去って幕下の士と作る

17 水南山人又繼往 水南山人又た繼ぎて往き

18 鞍馬僕從塞閭里 鞍馬僕從 閭里を塞ぐ

19 少室山人索価高 少室山人 価を索むること高く

20 兩以諫官微不起 兩たび諫官を以て微せども起たず

21 彼皆刺口論世事 彼は皆な口に刺して世事を論ず

22 有力未免遭驅使 力有りて未だ驅使せらるるを免れず

23 先生事業不可量 先生の事業は量る可からず

24 惟用法律自繩己 惟だ法律を用いて自ずから己れを繩す

「水北山人」「水南山人」「少室山人」と呼ばれているの

が、石洪、溫造、李渤という人たちを指していることを注

釈は教えるが、盧仝を「玉川先生」と称するのと同じく、

詩の均質な空間を作りだすのに機能している。彼らは隠者

として称されながらも、早晚官途に就く。しかし盧仝の閉

居は終南の捷徑ではない。

閉ざされた門の内側で盧仝は何をしているのかといえは、

25 春秋三伝束高閣 春秋三伝 高閣に束ね

26 独抱遺經究終始 独り遺經を抱きて終始を究む

27 往年弄筆嘲同異 往年筆を弄して同異を嘲り

28 怪辭驚衆謗不已 怪辭は衆を驚かして謗り已まず

29 近来自說尋坦塗 近来自ずから説う坦塗を尋ぬと

30 猶上虛空跨綠駟 猶お虚空に上って緑駟に跨る

この時期の春秋学は啖助、趙匡、そしてそれを継ぐ陸淳
らによって、三伝から離れて直接に『春秋』經を解釈しよ
うとする気運が高まり、それが柳宗元の思想形成にも影響
を与えたといわれているが、しかしここでは当時のそうし
た風潮には触れず、あたかも盧仝が独自に異端の学に打ち
こんでいるかのように述べられている。

經学が奇異に偏っていたのとともに、文学も奇怪であっ
た。本人は抑制しているつもりでもなお逸脱甚しい、とい
うかたちで奇怪ぶりを強調するのは、韓愈の「司門盧四兄
雲夫院長の望秋の作に酬ゆ」詩（元和六年）の中でも盧汀
に対して「望秋の一章は已だ驚絶、猶お言う低抑して謗讒
を避くと」と、似た言い回しがみえる。そこにもあるよう
に、彼らの「怪辭」「驚絶」は「謗不已」「謗讒」、周囲から
非難を被るものであった。經学においても文学においても、
盧仝は当時の正統に対立するところに位置していたことが
示される。しかし実はそれは盧仝に限ったことではなかつ
た。韓愈を中心とする文人たちは文学を構成するあらゆる
レベルにおいて、それまでのかたちを破ろうとする試みに

はなはだ熱心であった。⁽¹⁴⁾ 盧全もそうした傾向をもつグループの一人であり、その立場は韓愈と共通していたはずだが、しかしこの詩の中では韓愈は盧全の「怪辞」に驚く人々の側にまわっている。自分を伏せることによって盧全の奇矯な文学を際立たせているのである。そしてその奇矯の発揚が「猶お虚空に上って緑駟に跨がる」、地上の拘束から免れて天空を自在に疾駆するイメージで述べられているのは、韓愈自身の目指した文学の理想の姿をあらわしているよう。

学問、文学における盧全の奇矯なありさまは、この詩全体で描かれている盧全の人間の奇矯ぶりを示す一端として挿入されているものである。すなわち、文の奇怪さと人の奇怪さとは連続するものとして把握されている。後の時代、たとえば元代江南の文人の間で、奇怪なふるまいも文人としての特異な表現活動の一部とする風潮が生じたようにには一般に浸透していたものではなかったにせよ、韓門に属する皇甫湜や劉叉についての奇人ぶりがさまざまな話柄を生んでいることは、やはり文の奇と人の奇とが相関するものと考えられていたことの反映であろう。但し韓愈自身の記しているものに限れば必ずしも常にそうであるわけではなく、たとえば極端に逸脱した表現によって記憶されている樊宗師について、その人となりに関してはむしろ穏やかな面だけが述べられていることもある。⁽¹⁵⁾（「南陽樊紹述墓誌銘」）

以下、盧全が独自の生き方を貫いていることへの賞讃が連ねられているが、詩の後半は盧全の身近に生じた一つの事件を記している。

43 昨晚長鬚来下状 昨晚 長鬚来たりて状を下す
 44 隔牆惡少惡難似 牆を隔つる惡少は惡似べ難し
 45 每騎屋山下窺爾 毎に屋上に騎りて下を窺い爾る
 46 渾舍驚怕走折趾⁽¹⁶⁾ 渾舍驚き怕れて走りて趾を折る
 47 憑依婚媾欺官吏 婚媾に憑り依りて官吏を欺り
 48 不信令行能禁止 令の行あるを信ぜず能く禁止せんや
 49 先生受屈未曾語 先生屈を受けて未だ曾て語らず
 50 忽此来告良有以 忽ち此に來たりて告ぐるは良に以有り
 51 嗟我身為赤県令 嗟我れ身は赤県令と為りて
 52 操權不用欲何俟 權を操りて用いずんば何を俟たんとか欲する

53 立召賊曹呼伍伯 立ちどころに賊曹を召して伍伯を呼び
 54 尽取鼠輩尸諸市 尽く鼠輩を取らえて諸を市に尸せしめん
 世俗に妥協せず信念を貫いている盧全を悩ませていたのは、近所の不良どものたわいもないいたずらであった。この極めて卑近なできごとを「事業量る可からざる」玉川先生と取り合わせることによって、盧全の孤高も滑稽感を帯びてしまう。悪童の侵入にてこずった苦沙弥先生さながらである。苦情をもちこまれた韓愈も「良心的」県令としての役回りをおおげさに演じてみせることによって、全体の

戯画化を助けている。

さらに展開する韓愈の対応と盧仝の反応との交叉の中で、韓愈が狂言回しに徹していることはいよいよ明らかになる。ただちにひとつとらえてさらに首にしよという韓愈の申し出に對して、盧仝は異議を唱える。

55 先生又遣長鬚來 先生又た長鬚を遣わして來たらしむ

56 如此処置非所喜 此くの如き処置は喜ぶ所に非ず

57 況又時当長養節 況んや又た時長養の節に当たり

58 都邑未可猛政理 都邑未だ政理を猛しゅうす可からず

韓愈はそれを聞いて改めて盧仝の度量の大きさに畏敬の念を抱き、下々の無秩序がそもそもは上に立つ者の不徳に因ることをわきまえなかつた自分を恥じる。不明のおわびに明月、桃李のもと、一席設けたいと申し出て詩は結ばれる。(59—66)

「古」の理念を純粹に抱き続けたがゆえに「今」の世から排斥された孟郊、世俗を拒否する態度を貫いたために生活の辛苦をしいられた盧仝、彼らの精神はいずれも韓愈自身も共有するところであり、且つまた中国士大夫の精神の系譜に流れ続けたものでもあつた。しかし韓愈は「孟生詩」「盧仝に寄す」詩の中で、それを正面から主張するのでなく、どちらの詩においてもその精神の高邁さゆえにわりを食っている人間の姿をユーモラスに描き出している。そこ

には古—今、あるいは世俗—反俗といった対立しあう関係の中で一方を主張するのではなく、そうした二項対立の既成の構図から自由な立場に遊ぶ、柔軟な精神の躍動を我々は見ることが出来る。ここに描かれた孟郊、盧仝を初めとして、いわゆる韓門に属する人々が韓愈の内蔵する諸々の傾向の一部をより純粹に、極端なまでに發揮しているのに對して、韓愈を韓門の文人たちと分かつののは、一つの立場に取まらず、様々な可能性を内包しているところにあるようにみえる。孟郊や盧仝が結晶の純粹さをその文学の魅力とするならば、韓愈は配列定まらぬ原子の自在な運動に特徴があるといえようか。そこに韓愈が中唐の文学者・思想家の中でとりわけ大きなキャパシティをもちえたゆえんがあるのだろう。

固定した構図から免れていたことともからんで、二人の人物の描き方に共通しているのは、いずれも現実にもとづきながらも、それを肉付けし、小説的なふくらみをもたせて人間を彷彿とさせていることだ。それはいわゆる伝奇小説がこの時期に勃興し、怪異の記述から脱して人間そのもののへ関心を移していくことを想起させる。韓愈は詩という様式の中に留まりながらも、従来の類型から離れた人間の姿を描き出そうとしている。

四 劉師命

「劉生」詩は韓愈が陽山に貶せられていた時期に知り合つた劉師命が、貞元二十一年、その地を離れるのを送別する詩であるが、送別の意は詩の末尾にわずかにうかがえるにすぎず、これも「孟生詩」と同じく、劉師命という人物をもつぱらうたっている。方世華の注では樂府題であるとするが、王元啓はそれを否定して「孟生詩」と同じ趣旨のものだというのも、人物そのものを主題としていることを指しているであろう。

孟郊や盧仝がその個性を独自の文学に結実させて今日まで名を伝えているのに対して、劉師命は無名の人物である。韓愈に「劉生」詩など三首があること⁽¹⁸⁾によってその名と事跡の一端が知られるのは、本人の作品はのこらず、彼に言及した文献のみ⁽¹⁹⁾みられない。

孟郊・盧仝と異なる点の第二は、二人を扱った詩が世と相容れない人間の姿を戯画化して描きながらも、彼らが依拠した「古」への志向なり反俗の精神なりは、士大夫の精神のありようとして正当性をもっていたことは否定できない。それに対して劉師命の方は、そうした士大夫の立場とは、以下の詩が明らかにするように、縁がない。彼の生き方を肯定する根拠は儒家の伝統的な価値基準の中にみつか

らないのだ。にもかかわらず、韓愈は「劉生」詩の中で、彼の前半生をたどりつつ、その人となりを描き出し、そこには劉師命に対する強い関心と深い同感がにじみでているようにみえる。

- 1 生名師命其姓劉
- 2 自少軒輊非常儔
- 3 棄家如遺來遠遊

生の名は師命 其の姓は劉
少き自り軒輊にして常の儔に非ず
家棄つること遠く遊するが如く來たりて遠

遊す

- 4 東走梁宋暨揚州

東のかた梁宋に走り揚州に暨る

- 5 遂凌大江極東陬

遂に大江を凌ぎ東陬を極む

- 6 洪濤春天禹穴幽

洪濤天を春き禹穴幽なり

- 7 越女一笑三年留

越女一たび笑いて三年留まる

- 8 南逾橫嶺入炎洲

南のかた横嶺を逾えて炎洲に入り

- 9 青鯨高磨波山浮

青鯨高く磨して波山浮かぶ

- 10 怪魅炫耀堆蛟虬

怪魅炫耀して蛟虬堆し

- 11 山慘譴諫猩猩愁

山慘譴諫して猩猩愁う

- 12 毒氣爍体黃膏流

毒氣体を爍かし黃膏流る

- 13 間胡不帰良有由

胡ぞ帰らざると問えば良に由有り

- 14 美酒傾水禽肥牛

美酒水のごとく傾け肥牛を禽る

- 15 妖歌慢舞爛不収

妖歌慢舞して爛として収めず

- 16 倒心迴腸為青睞

心を倒し腸を迴すは青睞が為なり

- 17 千金邀顧不可酬

千金もて顧ることを邀むれども酬ゆべからざるに

18乃独遇之尽綢繆 乃ち独り之に遇いて綢繆を尽くす

七言三十一句の詩のこままでが、劉師命の遍歴の記述にあてられている。その足跡は、出発点は明示されていないもののおそらく長安・洛陽周辺からまず東に向かい、梁・宋、河南省南部を経過して揚州まで。そして長江を渡って中国の東の極限、呉越の地に至る。更にそこから南下して五嶺を越え、嶺南の地に達している。すなわち劉師命は中原の中心的世界から東南の辺境へとひたすら向かっているのである。この行跡は「家を棄つること遺つるが如し」、家及び家に伴なう士大夫の道を放棄して、秩序から離脱する方向に走る彼の内面の動きと対応しているものだ。

前半生を費したこの放浪に一体どのような目的があったのか、それは明確に述べられることはなく、むしろ「越女一たび笑えば三年留まる」というように、行きあたりばつたりの気まぐれな流浪であったことが強調されている。南方の異様な世界に踏みこんでも旅はなお続けられる。どうして帰らないかといえ、それにはなるほどわけがある。水のように飲み放題の美酒、こつてりした牛肉、そして舞

姫の蠱惑。そうした酒食色の悦楽、それこそ劉師命の足を南方に引きとめたものであった。南方ゆえに一層強烈であったであろう官能の歓びに耽溺していくのは、父母在らば遠く遊ばずの教えからみれば、離経背道にはかならない。

「青鯨」以下の四句(9—12)は、南方の風土のおどろおどろしさを述べている。詩の展開の上で、ここはその地の恐ろしさを強調し、それにもかかわらず留まっているのは美女酒肉の享樂のためだと次へ続いているのだが、韓愈の南方異物の描き方は常に観念的で、且つ畏怖しつつ暗にそれを期待するかの気配が伴なうことさえある。韓愈自身、不本意にも陽山に流謫されて最初の南方体験をもったが、その怨恨を吐瀉する諸篇の中で辛苦を助長する南方の異物の描写はなほだ大袈裟であり観念的であって、不安恐怖の実感よりも彼の被害者意識を強調する面が強い。たとえば

「八月十五日夜 張功曹に贈る」詩(永貞元年)の、

7 洞庭連天九疑高 洞庭天に連なり九疑高し

8 蛟龍出没猩鼯号 蛟龍出没し猩鼯号ぶ

9 十生九死到官所 十生九死にして官所に到り

10 幽居默默如藏逃 幽居黙黙として藏逃の如し

11 下林畏蛇食畏藥 牀を下るには蛇を畏れ食には藥を畏る

12 海氣濕蟄蒸腥臊 海氣濕蟄にして蒸じて腥臊なり

「会合联句」(元和元年)の、

17 狂鯨時孤軒 狂鯨時に孤り軒かり

18 幽狄雜百種 幽狄 百種を雜う

「同宿联句」(同上)の、

5 毛奇視象犀 毛奇は象犀を視

6 羽怪見鵲鳩 羽怪は鵲鳩を見る

など、奇怪な動物たちに跳梁させて恐怖をかきたてることに、韓愈はなほだ熱心である。しかしまた一方で「叉魚」詩（貞元二十一年）のように、かの地独特の漁法について詳細に観察した写実的な作もある。また後年の潮州流謫の際には、「初めて南食して元十八協律に貽る」詩（元和十四年）の中で、南方産の奇怪な食用魚介類を一つひとつ記しているし、同じ時の「柳州の蝦蟇を食うに答う」詩（25）では蝦蟇を仔細に描写して、

25 余初不下喉 余は初め喉に下らずも

26 近亦能稍稍 近ごろ亦た能く稍稍たり

と、こわごと口にしていく様子が述べられている。こうして見てくると、韓愈の南方異物に対する態度には一種恐いもの見たさにも似たところがあるかのようだ。「劉生」詩のこの部分でも「青鯨」「怪魅」「蛟虬」「山獐」「猩猩」といった語をちりばめて、南方の異様な雰囲気をあおりたてつつ、そこには魑魅跋扈する世界に対する韓愈の好奇の念がうかがわれると思う。

さて、放蕩に身をまかせているうちに、劉師命も気が付けば頭に白いものを戴く年になっていた。（19—24）仕える人にもめぐりあえず、国へも帰れず、結局陽山の韓愈のもとへ身を寄せる。（25—28）韓愈に手ほどきを受けて研鑽を

積むこと一年、仕官の階梯に就く準備ができた。（29—31）

このように詩は劉師命が長い放浪生活から足を洗い、正道に就くべく回帰するところで閉じられている。孟郊・盧仝の詩の中で韓愈は自分をまともな人間の立場に置いていたように、ここでも士大夫としての生き方を教え諭す役にならわっている。事実、「後進を引き致す」（李肇『国史補』卷上）ことに熱心だった韓愈の、陽山における「韓門弟子」（同上）で劉師命はあつたわけだが、詩の過半は劉師命の放浪の叙述に費されている。そこには劉師命のような士大夫の道から逸脱した人間に対して、そしてその半生にわたる流浪に対して、深く共感するものがあつたことがうかがわれる。

韓愈が流浪、遍歴というものに格別の興味を抱いていたことは、ほかの作品の中にもみることが出来る。「恵師を送る」詩（貞元二十年）は、やはり陽山で知った遍歴僧恵師を送別する詩であるが、

- 1 恵師浮屠者 恵師は浮屠の者なるも
- 2 乃是不羈人 乃ち是れ不羈の人
- 3 十五愛山水 十五にして山水を愛し
- 4 超然謝朋親 超然として朋親を謝す
- 5 脱冠翦頭髮 冠を脱ぎて頭髮を翦り
- 6 飛步遺蹤塵 飛歩して蹤塵を遺す

仏徒である恵師の、仏法帰依の面よりも現世を脱した面からその人間を紹介し、以下、四明山、天台山、浙江、廬山、羅浮山、連州を経て陽山に至るまでの遍歴を記して、更にここで送別した後に経過するであろう九疑山、衡山、嵩山、華山の行程を全八十六句にわたって述べている。恵師の名山歴訪は実際には仏道修業の行脚であり、中に詳しく描かれている天台山絶頂における黎明の奇観も、恵師にとっては一つの宗教的体験であつたに違いないが、韓愈の筆は仏教との関わりには触れずに、終始して「不羈の人」の「山水を愛」⁽²⁷⁾としての遍歴として叙述を展開している。

「靈師を送る」詩（貞元二十年）も、陽山で僧を送別すること、「送恵師」詩の状況と同じだが、その遊行はむしろ劉師命に似ている。士大夫としてのコースを途中ではずれて、靈師を夢中にさせたものは、囲碁、博奕、詩、酒、歌——劉師命のような女色は含まれないものの、およそ仏徒にはふさわしからぬ快樂の追求であつて、それに加えて「勝を尋ねて險を憚らず」、危険を冒しての諸国放浪の旅が、この詩でも全九十句の大半を占める。とりわけ念入りに描写されているのは、瞿唐峽の急流で船が転覆し、靈師を除く同乗者全員が水死した事故であるが、その惨事も「靈師は懷に掛けず、冒渉道転延ぶ」、気にもとめずに冒険の旅を続ける靈師に、韓愈は魅きつけられている。陽山の地はそ

うした遍歴者たちが流れつく果てとして、体験談を聞く機会が多かったことだろう。靈師は「縦横に謠俗を雑え、瑣屑も咸な羅穿」、俗語をまじえながら事細かに再現してみせる話術をあちこちで披露していたらしい。「送靈師」詩は地方の太守の間に寄食しながら遍歴を続ける当時の詩僧の生態を知る記録資料としても興味深い。遍歴しながらその体験を語って聞かせる人があり、それを享受する層があり、そしてそれを韓愈のように文学に再構成する人がいたことを、この詩は伝えている。

韓愈がこのように人の遍歴の話を中心に聞き、それを詩に再現していることは、彼らの遍歴そのものに並々ならぬ関心を抱いていたことを証しているが、それは一体何を意味しているのだろうか。とりわけ陽山にいた時期に集中していることは、遍歴者と出会う機会が多かったのみならず、韓愈自身も一部を体験し、好奇心を触発された南方の風土への関心が彼らの話を通して満たされたり、あるいはまた韓愈の抱いていた被害者意識が更に險阻な旅の体験を聞くことによって慰撫されたりしたこともあったのかも知れないが、私には韓愈が荒々しい未開の空間の放浪に魅きつけられた心情は、彼が精神の領域において従来の秩序づけられた枠組を破って奔放に跋渉したことに対応しているように思われる。劉師命も恵師も靈師も、彼らを流浪に駆りた

てた実際の動機が何であつたかには触れられず、「少き自ら軒輊にして常の儔に非ず（『劉生』詩）、「乃ち是れ不羈の人」（『送惠師詩』）、「逸志 教えに拘われず、軒輊にして牽攀を断つ」（『送靈師詩』）、いずれも不羈奔放なその人となりと放浪生活とが結びつけられているのであつて、彼らの精神の横溢はまさに韓愈自身のものであつたのである。

五 おわりに

以上に挙げてきた韓愈の詩の中の人物たちは、それぞれの方向に向かつて当時の世間から逸脱し、そのすさまじい逸脱のエネルギーによって特徴づけられている。孟郊は「古」に完全に同化することによって今の世からはじき出され、盧全は世俗を激しく拒否することによって貧しく拙い生き方を余儀なくされ、劉師命は奔放な流浪生活の中に生を燃焼させたことによって老いて行き場を失なつた。そのためにいずれも進退極まつた彼らに對して、韓愈は保護者となり助言者となつているのだけれども、実は彼らの人間像の中にはなにがしか韓愈自身が投影されている。「古」の理念に徹した孟郊が韓愈と重なり合うことは言うまでもない。経学・文学における因襲の拒絶は韓愈と盧全に共通する。劉師命の放浪は韓愈のひそやかな希求を反映したものだ。しかしながら、韓愈は孟郊のように時代錯誤のまま

終らなかつたし、盧全のように反俗を貫きもしなかつたし、劉師命のように放浪もしなかつたことも事実である。そうしてみると、これらの人物は韓愈自身が懷包していたものを、實在の人物を通して実現させてみた姿といえるのではなからうか。詩の中の人物は韓愈自身ではもちろんないし、孟郊・盧全・劉師命の実際の姿そのものでもない。韓愈と彼らを結んだ線の延長上に描き出された像なのである。

注

- (1) 韓愈の作品の引用は、詩は錢仲聯集『韓昌黎詩集年集釈』（一九八四、上海古籍出版社。以下「集釈」と略す）、文は馬其昶校注・馬茂元整理『韓昌黎文集校注』（一九八六、上海古籍出版社。以下「文集」と略す）により、併せてその巻数を記す。ただし排印本には時に魯魚の誤りがまじるので（ことに「集釈」下冊）、東雅堂本『韓昌黎集』等を参照した。「文集」卷一。
- (2) 「為人求薦書」（『文集』卷三）では、「某聞木在山、馬在肆、遇之而不顧者雖日累千萬人、未為不材与下乘也、及至匠石過之而不睨、伯樂遇之而不顧、然後知其非棟梁之材、超逸之足也」と反転して用いている。
- (3) 「与于襄陽書」（『文集』卷三）に「士之能享大名顯當世者、莫不有先達之士負天下之望者為之前焉」という。
- (4) 「集釈」卷一の「孟生詩」注に（宋・方崧卿『韓集』）「拳正」云、樊（汝霖）本作「送孟郊詩」。
- (5) 「集釈」卷一。詩の繫年は同書による。
- (6) 「集釈」卷一。
- (7) 「醉留東野」、「集釈」卷一。

- (8) 「示兒」、「集釈」卷九。
- (9) 「答孟郊」、「集釈」卷一。
- (10) 「集釈」卷一。
- (11) 「落齒」「贈侯喜」「龍吏」などの諸篇。韓愈の自己戲画化の手法については「韓愈と白居易——対立と融和——」（『中国文学報』第四十一冊、一九九〇）を参照。
- (12) 「寄盧全」、「集釈」卷七。
- (13) 「酬司門盧四兄雲夫院長望秋作」、「集釈」卷七。
- (14) 拙稿「奇——中唐における文学言語の規範の逸脱」（『東北大学文学部研究年報』第三〇号、一九八〇）参照。
- (15) 「文集」卷七。
- (16) 「渾舍」の語義について、錢仲聯は「此処作全家解、与称妻為渾家之義異」と注しているが、できれば妻の意で解したい。
- (17) 「集釈」卷二。
- (18) 「集釈」に引く方世拳の注に「劉生本樂府旧題」といい、王元啓の注に「題曰劉生、与孟生詩同旨、或以為樂府古題、非是」という。
- (19) 「集釈」卷二に「聞梨花発贈劉師命」「梨花下贈劉師命」の二首が収められている。
- (20) 「八月十五日夜贈張功曹」、「集釈」卷三。
- (21) 「集釈」卷四。
- (22) 「集釈」卷四。
- (23) 「集釈」卷二。
- (24) 「初南食貽元十八協律」、「集釈」卷十一。
- (25) 「答柳柳州食蝦蟇」、「集釈」卷十一。
- (26) 「送恵師」、「集釈」卷二。
- (27) 「送靈師」、「集釈」卷二。